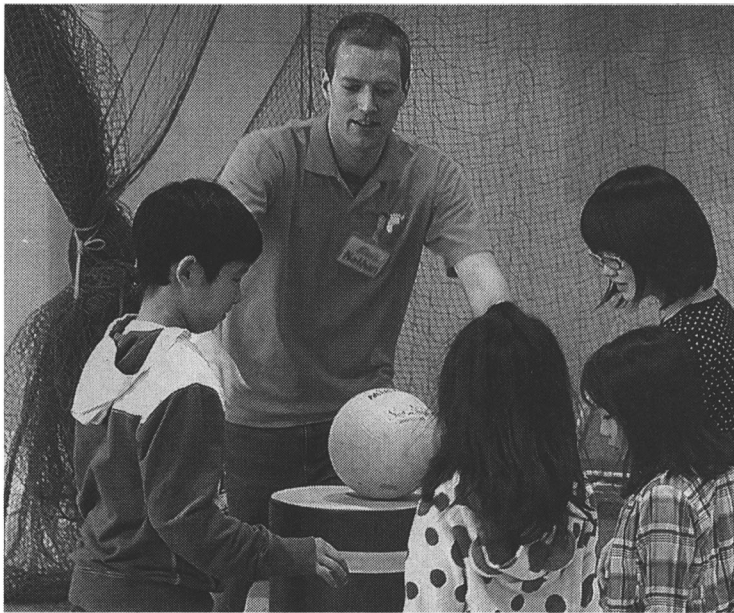


# スポーツ通じ 英語を「体得」

## 民間で子供向けに学習法が浸透

子どもに英会話をスポーツなどの体験を通じて身につけさせる学習方法が注目を集めている。小学校低学年からの英語の必修化が検討されるなど、幼少期から英語を学ばせる機運が高まる中、英会話教室や民間の児童保育などが導入。言語脳科学の専門家は「児童の興味を引きやすい上、決まった表現を繰り返し使う環境なので学習効率の向上も見込める」と指摘する。



外国人スタッフと英語で話しながら体を動かす児童(3月、大阪市港区)

「It's a ball!」「I can shoot」。3月中旬、大阪市港区の民間複合教育施設「アイアイキッズ」の体験入学会。参加した小学生は英国人スタッフの指示に耳を傾け、英語を話しながらボールを使い、体育館の中で夢中で駆け回った。

4月に開設した同施設の対象は乳幼児から小学生で、日本語は禁止。英語の文法や発音などの授業後、覚えた語彙を使ってスポーツや料理、図画工作などに取り組む。午後8時まで児童を預かるサービスもあり、日常でのやり取りの中で英語を定着させるプログラムになっている。小学生は週1回の月1万3千円のコースから受け付ける。

参加した港区の内野真唯さん(7)は「体を動かしてやるのが楽しかった」と満足げ。同伴した母親のめぐみさん(40)は「教室内で語彙を覚える勉強だけでは英語が身につけにくいと思った」と参加した理由を話す。

プロのスポーツ選手を目指す児童に英語で指導する教室もある。愛知県碧南市の英会話教室「ACC英語学院」は英国の名門サッカーアカデミーと提携し、2011年に英語で指導する小中学生向けのサッカー教室を開校。英プレミアリーグの名門クラブの下部組織で指導経験を積んだ同国出身のコーチが技術や戦術を教えている。受講者数は開校時の3倍を超える80人に増加。海外のプロ選手を目指す児童も少なくないという。同学院の足達雅芳社長(63)は「10代で海外に渡るアスリートも少な

くない時代。英語の習得は最終目的でなくなっている。コミュニケーションに軸を置き、英語に慣れる環境が必要と考えた」という。

小中学校で全国初となる株式会社立の「LCA国際小学校」(相模原市)では昨春、外部生も参加できる特別講習として英語で演じるミュージカルのクラスを新設。今年も3月下旬に4日間、音楽担当の外国人講師が英語で歌唱や演技の指導をした。同校は「英語で演じること、言葉のニュアンスなどから日本の感覚の違いなどを学べる」としている。

東京大学大学院総合文化研究科の酒井邦嘉教授(言語脳科学)は「スポーツなど決まった表現を反復して使う環境下ならば、英語の表現と意味が結びつきやすくなる」と指摘。「身につける動機がはっきりするので児童も取り組みやすく、『使

える』という自信がつけば学習効率の向上も期待できる」と話している。

## 反復で効率上がる